

no.8

# CLC からしだね書店便り



8 2021 August

CLC からしだね書店では…

- 1 キリスト教書のほか、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もたくさん揃えたいと思います。
- 2 お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
- 3 ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチ等をご提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- 4 コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
- 5 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、お好きな本を手にとってお読みください。
- 6 古書の販売もする予定です。
- 7 読書会や著者を招いての講演会など、人と人が出会い、つながる「対話」の場を提供したいと考えています

『はだしのゲン』 作者 中沢啓治  
汐文社・集英社・ほるぷ出版社・中央公論新社他



「書店日より8月号に、戦争についての本を紹介してほしい」

そう店長から依頼があった瞬間、頭が真っ白になった。本の紹介？感想文？卒業してから文章などろくに書いていない。その上戦争と言っても、いつの時代、どの戦争を取り上げた方がいいのか。8月号ということだからやはり、「日本国内」の戦争を取り上げるべきなのか？さんさん悩みに悩んで「はだしのゲン」を紹介しようと思ったその日の夜中、原爆投下後の惨状を描いた場面が夢の中に現れて、目が覚めてしまった。

眠れぬまま、翌日の通勤電車の中で目を閉じると、こんどは頭の中に「かあちゃん、あんちゃん、あついよ」とゲンの弟が叫ぶ場面が浮かび、涙がぶわつと出てくる。睡眠不足と情緒不安定…。そんな事が何度も続き、家族からは「もう、はだしのゲンはやめて、別の本にしたら」と言われる始末。

私が「はだしのゲン」を読んだのは、小学校の頃。自宅の本棚に絵本があり、小学校の図書館で漫画を読み、教室で映画も上映された。もう何十年も前の事なのに、思い出すと夢でうなされるほど、通勤途中で突然涙が出てくるほど、怖くて、辛くて、悲しい漫画だった。

漫画を読んだだけの私ですら忘れられないのに、実際にあの光景を目にした人達はどんなに辛かったろう。一瞬の熱線で焼かれ、建物に押しつぶされ、灼熱の炎に巻かれ、黒い雨に打たれ、実際に原爆を体験した方の気持ちは、どれだけ苦しく辛かっただろう。

作者の中沢啓治氏は、原爆投下後の惨状を「こんなもんじゃないんだ」と描き続けたという。いったいどんな思いで描いていたのだろうか。私なんて漫画の紹介を書くだけでこんなに重く、苦しい気持ちになるのに。

それでも、今回の書店だよりで、どうしても「はだしのゲン」を取り上げたいと思った理由は、「はだしのゲン」には、原爆の悲惨さだけでなく、日本がどのようにあの愚かな戦争に突き進み、悲惨な結末を迎えたかがきちんと描かれているからだ。

また、漫画の中に、朝鮮人被爆者が治療を拒否される場面も出てくるが、なぜ、朝鮮の人が日本で原爆に遭わなければならなかったのか。日本が朝鮮を無理やり植民地とし、強制的に日本に連れてきて、働かせていたからだ。

日本は被爆国というだけではなく、加害国でもあるということを忘れてはいけない。太平洋戦争で日本人300万人以上が亡くなったが、アジアでは2000万人以上が日本人によって命を奪われた。台湾・朝鮮の植民地支配、強制労働、従軍慰安婦や、中国での南京大虐殺、731部隊、三光作戦、その他アジア各国での残虐な蛮行の数々。(あまりにも多くて、とても書ききれない)

そこには、戦争だから残虐になれたというだけでなく、さらにアジア人等に対する差別意識が、それを加速させていったと思う。自分たちも同じアジア人であるというにもかかわらず。

今の時代が、戦前、戦中に起きた出来事と恐ろしいほど似ていると感じる。

1923年関東大震災 ↓ 1925年治安維持法 ↓ 1940年東京オリンピック ↓ 1941年太平洋戦争

2011年東日本大震災 ↓ 2013年秘密保護法 ↓ 2021年東京オリンピック ↓ 202X年 ?

戦時中、反戦を唱える人達は、非国民と罵られ、投獄され、拷問され、逆に戦争に加担していた人達は、戦後手のひらを返したように、「実は戦争には反対していた」と言い出した。

今のところ、私たちには発言の自由がある…と思う。特高や憲兵はいない(たぶん…)。逮捕、投獄されることもない(どっだろう…)。拷問されることもない(どっかな…)。

でも、もし時代の流れが戦前のようになってしまうたら、また同じような過ちを犯してしまうかもしれない。

依頼を受けてからのこの一ヶ月、漫画の場面が度々フラッシュバックのように浮かび、どうしてこんな思いをしてまで書かなくてはならないのかと、本当に辛かった。(好きな本をオススメできるなら、文章を書くのが苦手な私でもどれだけ良かったか)でも、辛かったのは、原爆投下後の悲惨な状況や、他国へ残虐の加害場面を思い出すだけでなく、自分が無意識に持っている差別意識・偏見、人間の汚さや、卑怯な部分を、炙り出され、突きつけられたからだ。

戦争は人間を凶器に変えてしまう。戦争は人間性を失わせてしまう。だから戦争は絶対にしてはいけない。本当に当たり前の事だが、戦争は絶対にしてはいけない。そのことを「はだしのゲン」は私たち戦争を知らない世代に伝えてくれている。「なぜあの時に止めなかったのか?」と、将来言われないように、私たちは過去の戦争に向き合わなくてはならないし、過去の行いを決して忘れてはいけない。そしておかしなことはおかしいと、声を上げなくてはいけないと改めて思う。日本が再び焼野原になった後「私たちは知らなかった。騙されていたんだ。」と言わないために。

(からしだね職員A)



## 《お知らせ》

◆からしだねの「おすすめ本スポンサー」システム◆について

**あなたのイチ押しの本を、店に置かせていただきます**

「この本、ぜひ皆さんに読んでほしい」というあなたのおすすめ本。3か月間店頭においてみませんか? 残念ながら売れ残ってしまったら、ご自分で買い取ってお友達にプレゼント...という仕組みです。(書店に在庫をためこまず、皆さまの「推薦良書」を広くご紹介いただける。...そうならいいなと思っています。) 店内配置等については、当店にお任せください。種類によっては、ご希望に沿えない場合もあります。

## 【連載】子ども言葉がひろく時

### 第7回:子どもたちを取り巻く

### 「呪いの言葉」と「祝福の言葉」

人間は言葉なしでは生きていけない存在ですが、同時に言葉ほど厄介で扱いづらいものはありません。人を励まし、自由にする言葉があるかと思えば、人を縛り、がんじがらめにする言葉もあります。ネット空間を覗いてみると、もちろん胸のすくような言葉も見つかりますが、憎悪と分断を煽る呪詛としか思えない言葉にも数多く出くわすのです。現代を生きる子どもたちにとって、SNSを始めとしたオンラインの世界は良くも悪くも避けて通れないものとなりました。ネットのおかげでたくさん情報を仕入れることができる反面、過剰なまでにつながり過ぎてしまったり、暴力的な表現が容易に目に飛び込んできてしまったり、残念ながら、この世の中には、人を殺すほどの瘴気(しやうけい)をまとった「呪いの言葉」が確かに存在するのです。

内田樹は『呪いの時代』(新潮社)という本の中で興味深い考察をしています。いわく、古来の漢詩では「国褒め」という形式の詩があるそうです。「国を褒める」というのですから、さぞ大げさに「褒めそやす」イメージを持たれるかもしれませんが、「国褒め」の中身を見ると、「こつしたイメージとは趣きが異なります。『目』に映る風景をただただ繊細に描写する」という、それだけの詩なのです。たとえば、「豊平川を鮭が泳いでいる。藻岩山の木々が青々と生い茂っている。空はどこまでも青く広がっている。北大農場の牛がのどかにモーと鳴いている。ああ、札幌はいい街だなあ」というように(そう言う私は札幌市民です)。「こつした」ただありのままを描写する言葉「こそ、呪い」を鎮めうる「祝福」の言葉だというのが、自分の思い通りにならないとすぐに「死ねホケー!」と、暴力的な言葉を吐いてしまうシンくんという中学生がいました。

臨床心理士  
坂岡 大路  
1988年京都市生まれ。北海道大学大学院教育学院臨床心理学講座修士課程修了。訪問型フリースクールや、中学校、児童をを経て、現在、札幌市内の児童精神科に勤務。臨床心理士、公認心理師。2019年『2021年『成長』(いすちのこ)は社』誌に「こころで学ぶ教会学校」を連載。

(※実例を組合せた架空事例です。) 父親の面前DVを経験するなど、複雑な家庭環境で育った子です。父親の「呪い」が彼を引き継がれてしまった面もあるのでしょうか。彼自身は、本当は周りから認められたいし、受け容れられたい。でも「助けて」「困ってます」の一言が言えない。その代わりに、暴力的に脅すようなことを言ってしまう。なぜでしょうか。

「周りは敵だ。」「人は自分の弱みを見つけたら攻撃してくる。」「…こんな世界観の中で生きているとしたらどうでしょう。こんなギスギスした世界で生きているとしたら、自分にはこういう弱みがある」と認めるのは、実に恐ろしいことです。」「できない」「ことや」「弱い」部分があるとばれたら、すぐに存在を否定されるのですから。

私はある日のカウンセリングで、彼とこんなやり取りをしました。

「ねえ、シンくん。『死ね』とか『うざい』って言うのは、きつと言いたくて言っているわけじゃないよね。シンくんは理由もなくそんなことをする人じゃない。よっぽど腹の立つことがあったってことでしょ。」「

「そっだよーあいつが悪口を言ってきたから言い返しただけじゃん。」「

「うんうん。悪口言われて、カーって腹が立つってね…。それで言い返さなきゃ、プライドが許さねえ。もう腹の虫がおさまらねえー！ってわけね…。(しばらく共感的に耳を傾ける。)よく話してくれたね。そんなに腹立ったのに、「こうして落ち着いて振り返れるっていうのは、シンくんのカリカだよな。ところでさ、シンくんは怒ることどう思ったのかな?」「

「嫌なことされるでしょ。怒って『死ねボケ』って言うでしょ。そしたら、周りはシンくんのことを『なんだアイツ』って思って、また嫌な悪口言われたわけでしょ。それでシンくんはまた怒って『死ね』って言い返したら、それにまたみんなは『何だアイツ』ってなって、『うざい』『とか悪口言われたわけでしょ。それでシンくんはまた怒って……。」「

「いや、もういいよー(笑)」「

「ナイスツッコミ…(笑)いや、実際さ。この一連の流れについてはどう思っているの?」

「…まあ、正直やだ。」「

「あんまり望むシナリオじゃない。」「

「うん。」「

「これでシンくんが得してるならいいんだけど、なんか結局損してるみたいな。」「

「マジ損。いやぶざげんなって感じ。」「

「そうね。シンくんにも言い分があるのにな。なんかシンくんばかり悪者扱いで悔しくない?って。…じゃあさ、シンくん的には、周りの人にどうしてほしいかあったのかねえ…。」「

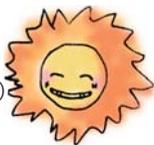
「…話を聞いてほしい。」「

彼に対して私がやったことは、ただ描写することでした。」「自分なりの歴史と事情を背負って、今懸命に生きているあなた。』『死ねボケ』『うざい』と言いつつループをずっとくり返しているあなた」のあり様を。

人は何をきっかけに「呪い」のループから抜けようと思えるのでしょうか。その答えこそ、「ありのままの存在の承認」だと思つたのです。今懸命に生きている自分の姿を、丁寧に繊細に描写してもらつて、自分自身の生身のあり様に気づくことです。

私は昔、上級者の先生からこんな風に指導されたことがありました。」「クライアントの鏡になりなさい。鏡を見ればカウンセラーからあれこれ指示されなくとも、自然と髪型を直したくなるでしょう。」「もちろん十分な信頼関係ができていて、相手も納得しているなら、指示することも悪くありません。しかし、「あれをしろ」「これをしろ」と一方的に言われ続けると、私達はどうな気分になるのでしょうか。かえって反発したくなったり、「否定された」ような思いになったりはしないでしょうか。たとえ不器用でも、自分の生きている姿を、振る舞いを、想いを、今ここで生きている在り様を、丹念に映し取ってもらえること。その積み重ねが「存在を承認されている」「実感となり、生きる力になっていく」と思つたのです。

一方で、どうでしょうか。今の日本では、「存在承認」とは真逆の、「その人のあり様を(善意で)否定する」「習慣や振る舞いが、あまりにも自然に流布している気がします。たとえば、こんなエピソードを聞くことは珍しくありません。黒以外の毛髪の生徒に地毛証明書を出させる。勉強が苦手な子のテスト用紙に並ぶ赤い「✓」の連打と「○」の文字。靴箱



## からしだね館のひととき —こころ病む人の支援—

### 「希望にいつぱいでチャレンジ開始!」

今日の主人公は、大学生のAさんです。彼女は偏差値の高い大学の福祉学部4年生です。精神保健福祉士の実習のため、からしだねに2週間の予定でやってきました。

(注:この実習は精神保健福祉士の国家資格試験を受けるための必須科目です。)彼女は、大学を卒業したら、こころの病や障害のある人の支援をしたい、そのために精神保健福祉士になることを希望していました。

### 「喪失」のはじまり

彼女が実習開始の前日に私に電話をしてきました。「提出書類の一つが明日までに用意できません」ということでした。この書類は、事前に大学を通して、この書類がないと実習が開始できない、と伝えていたものです。どうして用意ができないのかと尋ねると、「忘れていました」とのこと。実習開始直前まで大学の授業の課題提出に追われ、実習の書類まで考えることができなかったそうです。彼女なりの理由はあるけれども、書類がないと開始できません。仕方なく実習の予定を変更することになりました。彼女は予定の変更になるとは思いもしなかったらしく、非常に残念そうにしていました。

### 「あれ、おかしい...」

仕切りなおした日程で実習が始まりました。彼女と実習指導者である私は、初日の朝一番に、今後の実習についての確認をする時間を持ちました。「書類の不備で実習の開始が遅れてしまいましたね。大学の授業の調整はきちんとできましたか?」と尋ねたら「はい。頑張って調整しました!」と涼しい顔で答えました。そして提出する書類を受け取りました。しかし: たった5種類の書類でしたが、問題となった書類以外にも見落としがあり、4種類しか提出

から少し靴がはみ出ているだけで呼び出しを食らい、**嚴重注意**。生徒手帳には「中学生らしい」**服装・文房具・髪型**を」の記載…。もちろん、これらはすべて「子どもの成長のため」を思って、〈善意で〉行われる指導です。しかし、「学校から一方的に与えられたルール(枠)の中でずっと生活しなければならぬ」という指導のもとで、子どもは一体どのような育つのでしょうか。「みんなと同じ」にならなければ、「平均以上」にならなければ、「勝ち組」にならなければ、存在を認められない。一旦枠から外れれば、「枠にはまれない自分は駄目だ」。枠から外れている人を見かければ、「自分は外れないようがんばっているのに、そうしない人はずるい」…。こんな風に、自分と他人を「裁く」子どもを量産してしまうのではないのでしょうか。まるで福音書に出てくるパリサイ人のように。

「裁いてはならない」。イエスの有名な言葉です。この言葉は、次のようにも言い換えられるでしょう。「裁かなくていい。あなたはあなたのまま、生きていていい」。当たり前と言われるかもしれませんが。しかし、この「当たり前」が極めて鈍感に、無自覚に、平然と踏みこじられる事例が、日本ではあまりにあふれすぎています。

この文章を書いているちょうど今のことですが、「理由のはっきりしない若者の自殺が増えている」というニュースを見かけました。そのニュースに出ていた若者の口から、「漠然とした不安」という表現も聞かれました。友だちもいる。趣味もある。いじめられているわけでも、虐待されているわけでもない。それでも、この社会の中でこれ以上「生きていたい」とは思わない…。子どもたちが伝えてくれている生きづらさのサインを、私達は今一度かみしめなければいけません。

### 《お知らせ》

- ◆教会や保育園、幼稚園等で、定期刊行物や新刊書、用品等のご注文をある程度まとめて頂きましたら、月1回、無料の定期便でお届けします。
- ◆お近くにキリスト教書店が無い場合など、ご希望により、新刊書や用品(グッズ)の訪問販売を検討させていただきます。
- ◆再版発行のリクエストをお寄せください。絶版した良書で、再版してほしいものがありましたら、お知らせください。ある程度リクエストがまとまりましたら、出版社に情報提供したいと思えます。

この連載では、からしだねで出会う人たちの「喪失」について取り上げました。「喪失」を経験した人たちのストーリーをみなさんとシェアしながら、「喪失」から見える世界を一緒に考えていきたいな、そんな思いで書いています。



# 献本について お知らせ

たいへん申し訳ございませんが、  
送料をご負担いただけると  
ありがたいです。  
書店への直接お持ち込みも  
ありがたいです。

## 【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本（多少、書き込み等があっても、大丈夫です）
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし（料理、健康、経済等）にかかわる本
- 5 小説（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）
- 6 漫画（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）

## 【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勸修寺東出町75 からしだね館

宛先：CLC からしだね書店 献本係 電話：075-574-1001 FAX075-574-0025

Mail：clc@karashidane.or.jp

## 【本と一緒にいただきたいもの】

以下の内容を記入したメモ

①献本者のお名前②住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィール、献本いただいた本の感想や思い出等を一言。⑥献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思えます。お名前の掲載は困るという方は、お知らせください。

【古本の売上を含む CLC からしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】

## 【献本感謝】

たくさんの方の献本をありがとうございます。最新の献本者のお名前は次号にご報告いたします。

## 編集後記

◆新型コロナウイルスとオリンピックと猛暑と災害と、そして戦争の記憶…。いろいろなことが同時に起こっているこの夏。いろいろな気持ちがあふれ、そんな気持ちをどちらに向ければじっくりくるのか、答えのないままに毎日が過ぎていくように思います。◆読書感想本のコーナーでは、からしだねの職員が「はだしのゲン」を取り上げました。◆付録として、戦中の教会のクリスマス祝会のプログラムと、京都のプロテスタント教会が集まって行った「皇紀二千六百年奉祝」の「礼拝」プログラムもはさみました。いずれも信徒さんが大事に保管していたものです。私たちはそこから何を学ばなければならないのか。未来がまた逆戻りしないために、私たちは何をするのか。◆書店には、「平和について考えるコーナー」を作っています。

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね  
就労継続支援A・B型事業所からしだねワークス  
からしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勸修寺東出町75 からしだね館

書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025

書店メール clc@karashidane.or.jp